

歩車融合の優しい社会を目指して

● 東京都／小栗幸夫さん

「わ あ、かわいい！ これ何？」
「えっ、乗ってもいいですか」

大学のキャンパスで遊んでいた子供たちが、黄色い小さな車をめがけ、一目散に駆け寄ってきました。

「この車はゆっくり走るから、みんなと一緒に散歩もできるんだよ」
にこやかにそう語りかけるのは、

千葉商科大学大学院客員教授の小栗幸夫さん（70歳）です。長年、大学や企業でさまざまな都市計画に参画する中、車中心の道路整備によって懐かしい「まち」が消え、高速度での悲惨な事故が多発することが現代社会の根源的な問題と見え、「歩車融合」の優しいまちづくりを目指して研究と実践を続けてきました。

「ソフト&セーフ」という交通キャンペーンを茨城県つくば市で展開したのは今から35年前。直接のきっかけは、当時、教鞭をとっていた筑波大学の学生5人が、衝突事故で死傷するという痛ましい出来事でした。「人間は必ずミスを犯します。しかし、速度を抑えることで多くの事故は回避できるはず。そこで、環境に



姉の死から5年後に誕生したソフトカーの電気自動車版。2005年の「愛・地球博」ではパレード車を務めた。子供たちにも大人気だ。

応じて車の最高速度を制御し、歩行者や他の車などとコミュニケーションする仕組みを今の車に組み込めないか、と考えたのです」

このような車を「ソフトカー」と名づけた小栗さんは、メディア等で積極的に提案を始めました。

そんな小栗さんのもとに突然の知らせが届いたのは、1997年4月17日のことでした。姉の妙子さん（当時59歳）が自転車でパート先に向かって途中、事故に遭ったというのです。現場は岐阜県可児市のT字路。原因は加害者のブレーキとアクセルの踏み間違えでした。

「ああ、僕の家族も被害の渦に飲み込まれた……」
集中治療室でたくさんチューブにつながれている姉と対面したとき、悔しさがこみ上げました。

12日後、妙子さんは一度も目を覚ますことなく息を引き取りました。「なんとしてもソフトカーを実現させねば……」。改めてそう誓った小栗さんは3年後、国の革新的プロジェクトに研究計画を応募しました。

妙子さんの長女・みどりさん（51歳）は振り返ります。

「母が亡くなったとき、私の下の子はまだ1歳でした。当時は辛くて何もできませんでしたが、叔父のソフトカープロジェクトが国で採択され、その手伝いをするようになってから、現実と向き合えるようになってきました。今もソフトカーと接するたびに「お母さんきつと喜んてるよね」、叔父とそんな会話を交わしています」
WHOは2013年の世界の交通事故死者数を年間125万人と推計。この数字の裏側に、どれほどの悲しみが隠れているのでしょうか。

「『水鳥の足はいつも水をかいている』。亡き姉が僕に遺してくれたこの言葉は、見えないところで不断の努力を続けなさいというアドバイスです。車に依存し、スピードを追求し続けてきた私たちの社会は、あまりに多くの犠牲者を生んできました。でも、悲しんでいるだけでは前には進みません。この先も『脱・スピード社会』の理念を世に広め、学外にも組織を作り、実現を目指します」